

生研 ニュース

PHOTO 岡宮誠一

1992.5.15
No.16

IIS TODAY

●千葉実験所
飯沼正雄
事務官(守衛)

桜が満開の千葉実験所、そこで昭和59年から守衛さんを勤めていらっしゃるのが、飯沼正雄さんである。

飯沼さんは、宇宙航空研究所、武蔵野独身寮、さらに宇宙科学研究所などで長年事務官として勤めてこられたが、その間一貫して人の和を大切にしてきた。昭和46年から54年までの武蔵野独身寮の管理人時代には、家族ぐるみで独身者の炊事・洗濯などの世話や、寮のレクリエーションの企画にあたるなどして、多くの職員に愛されてきた。この生研にも、飯沼さんにお世話になった方が大勢いると聞く。

守衛をしている今は、門を通り過ぎるわずかの時間に、人とのコミュニケーションを見つけることを、一番の楽しみにしているという。ただ、最近は簡単な挨拶もなしに通り過ぎる若者が増えてしまったと、少し残念に思っておられるようだ。挨拶の励行、とかく忘れがちな社会生活の基本を思い起こさせてくれた。

趣味は、ゴルフ、ソフトボールなどのスポーツと、カラオケだ。今年のお花見でも、飯沼さんご自慢の“はるみ節”が興を添えたことであろう。

(M.K)

■ 盛会だった退官記念パーティ

3月24日に第1会議室において定年退官教官記念パーティが記念講演会に引続いて行われました。本年は第一部本間禎一教授、第二部柴田碧教授、第三部浜崎襄二教授、山口楠雄教授の四名が退官されました。パーティは岡田前所長

の挨拶で始まり、本年からは総長からの記念品がパーティの席上で前所長から贈呈されることとなりました。所外からのパーティ出席者もあり、四名の教授の退官を惜しみつつ盛況の内に閉会となりました。(T.M)



■ 恒例の外国人研究者・留学生との懇談会開かれる

いまや恒例となった外国人研究者・留学生と本所教職員との懇談会が3月11日(水)、健保会館において開かれた。日英バイリンガルによる岡田所長の挨拶、生駒国際交流室長による乾杯の音頭に続いて懇談に入った。今年度担当部の第1部高木教授と私の司会で進められ、各部の外国人研究者・留学生のスピーチ、中・韓・台3国か

らの留学生グループの合唱による各国、歌の競演、さらには日本人プロフェッサーズによる日本国小学唱歌も飛び出し、なごやかな交流に終始した。参加者約150人(うち14か国からの外国人約100人)。記念撮影を行って、盛会のうちに散会した。

(第1部 渡辺勝彦)



■ 尾上名誉教授、奨励会理事長に就任

平成4年度生産技術研究奨励会臨時理事会は平成4年4月6日(月)、第20期理事長および常任理事の選出を議題として開催された。

はじめに、平成4年4月1日付で生研所長に就任した原島文雄教授と各理事の紹介があった。

議事はまず、鈴木前理事長退任後の理事長の互選が行われた。その結果、満場一致で尾上守夫名誉教授が承認され、受諾された尾上新理事長から就任の挨拶があった。ついで、議長は尾上新理事長に代わり常任理事について議長から原島文雄教授の推せんがあり、満場

一致で承認された。

議事終了後の懇談会において、鈴木前理事長から平成4年3月末をもって理事長在任8年を終えたことについて、あらためて挨拶があり、また本会の設立の趣旨なら

びに経緯等についての説明と、今後のあり方等について希望が述べられ、理事会は終了した。

(R.K)



後列左より 北川経理担当、島田事務員、鈴木理事、前田事務員、瓜生理事、齊藤事務主任、棚澤理事、原島常任理事、片山理事、島尾理事、葛西庶務担当、前列左より 佐藤理事、三井理事、鈴木前理事、尾上理事長、中原理事、岡田理事

●生研訪問者

1月21日(水)

趙 要翰崇實大 schools 校長・韓国

2月12日(水)

日韓文化交流基金日本視察団
李 相禹団長 (ほか11名・韓国)

●外国人研究者講演会

3月11日(水)

司会：林 教授

Prof. Richard Brook
Department of Materials, University of Oxford,
England
"Study on Ceramics in Europe"

3月18日(水)

司会：本間 教授

Prof. Stanislaw Mrowec
Institute of Materials Science, Krakow, Poland
"The Problem of Sulphur in High Temperature
Corrosion"

3月19日(木)

司会：工藤 教授

Prof. Patrick S. Nicholson
Department of Materials Science and Technology,
McMaster University, Canada
"Manipulation and Applications of β -and β' -
Alumina"

3月25日(水)

司会：高木 教授

Prof. William Kubitz
Department of Computer Science, University of
Illinois, U. S. A.
"Object Oriented Graphics"

3月30日(月)

司会：橘 教授

Prof. Edward Ozimek
Institute of Acoustics, Adam Mickiewicz University,
Poland
"Selected problems in technical and applied
acoustics"

●客員研究員 (1992.4.8現在)

氏名	国籍・現職	受入研究室
Said M. Easa	カナダ・レイクヒード大学 土木工学科教授	第5部 桑原研
Victor A. Pulmano	オーストラリア・ニューサ ウスウェルズ大学助教授	第5部 半谷研
吳 顕礼	中国・中国科学院自動化研 究所助教授	第3部 高木研
Vadim I.Utkin	ロシア・モスクワ自動制御研 究所離散制御システム研究所長	第3部 原島研
Amr Salah Elnashai	英国・インペリアルカレ ッジ(ロンドン)土木工学科 リーダー	第5部 高梨研
郭 奇亮	中国・貴州工学院機械工学 系助教授	第2部 木村研

●博士研究員 (1992.4.8現在)

氏名	国籍・現職	受入研究室
Alexander Gelfgat	ラトビア・ラトビア大学数学お よび計算科学研究所研究員	第2部 棚澤研
龔 怡虹	中国	第3部 坂内研
Pramod Balkishna Kangutkar	インド・(米国) Drexel 大学 研究助手	第4部 香川研
Bassan Afif Izzuddin	レバノン・英国インペリア ルカレッジ講師	第5部 高梨研
Ahmed Youssef Elghazouli	エジプト・インペリアルカ レッジ(ロンドン)土木工 学科博士研究員	//
許 金泉	中国	第1部 結城研
徐 蘇斌	中国・天津大学建築系講師	第5部 藤森研



松に桜：何 花札？ 答えはNO

生産技術研究所附属千葉実験所構内にある松に桜が生えているのである。
門を入ってすぐ左手にある樹齢5~60年の松の地上1.5Mの処より桜が生えているのだ。
幹の太さ5センチ位 4~5年は経っているようだ。

昨年実験所にきた研究者が発見し教えてくれた。

今年花が咲けば面白い写真が撮れるなど観察していたが、4月16日に花が咲いているのを見付けた。青々とした葉の先に3輪程咲いているではないか。

学術的価値については専門家に委ねるとして、生命の不思議に只々感心するばかりである。

(千葉実験所 事務主任 初芝 記)

PERSONNEL

■人事異動 (平成4年2月16日～平成4年4月1日)

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属)
2.16	魚本 健人	昇任	文部教官教授(第5部)	文部教官助教授(第5部)
〃	市野瀬英喜	配置換	文部教官助手(工学部)	文部教官助手(第4部)
〃	徳満 和人	〃	〃	〃
3.1	宇都宮昇平	昇任	文部教官助手(第3部)	文部技官(第3部)
〃	宇田川 誠	採用	文部事務官経理課用度掛	〃
3.16	中 埜 良 昭	昇任	文部教官助教授(第1部)	文部教官講師(第1部)
3.18	宇田川 誠	辞職	〃	文部事務官経理課用度掛
3.31	本間 禎一	定年	〃	文部教官教授(第1部)
〃	柴田 碧	〃	〃	文部教官教授(第2部)
〃	山口 楠雄	〃	〃	文部教官教授(第3部)
〃	濱崎 襄二	〃	〃	〃
〃	遠藤 敏彦	〃	〃	文部教官助手(第2部)
〃	松村 治	〃	〃	用務員 総務課庶務掛
〃	宇都宮昇平	辞職	〃	文部教官助手(第3部)
〃	原田 和幸	〃	〃	文部技官(第3部)
4.1	原 島 文 雄	所長併任	生産技術研究所長	〃
〃	岡田 恒男	〃 終了	〃	生産技術研究所長
〃	村上 周三	併任	附属計測技術開発センター長(再任)	〃
〃	中川 威雄	〃	附属先端素材開発研究センター長(再任)	〃
〃	高木 幹雄	〃	附属機能エレクトロニクス研究センター長(再任)	〃
〃	神 裕之	〃	文部教官教授(第3部)	文部教官教授先端科学技術研究センター
〃	田川 泰敬	転任	文部教官講師東京農工大学工学部	文部教官講師(第2部)
〃	本田 融	〃	文部教官助手高エネルギー物理学研究所	文部教官助手(第1部)
〃	川勝 英樹	昇任	文部教官助教授(第2部)	文部教官講師(第2部)
〃	大野 正弘	採用	客員部門助教授(第1部)	〃
〃	高橋 琢二	〃	文部教官講師(第3部)	〃
〃	大島 まり	〃	文部教官助手(第2部)	〃
〃	諸 正信	〃	〃	〃
〃	趙 源丞	〃	文部教官助手(第4部)	〃
〃	山口 明	〃	〃	〃
〃	杉山 澄雄	配置換	文部教官助手(第2部)	文部技官(第2部)
〃	宮路 壽男	〃	文部事務官大型計算機センター事務長	文部事務官経理課長

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(所属)
4.1	相浦 勝巳	配置換	文部事務官附属図書館総務課課長補佐	文部事務官総務課課長補佐
〃	宮田 弘	〃	〃 農学部 人事掛長	〃 総務課庶務掛長
〃	橘 輝	〃	〃 法学部 会計掛長	〃 総務課出版掛長
〃	風間 勉	昇任	〃 社会科学研究所図書主任	〃 総務課図書掛長
〃	尾越 和博	配置換	〃 工学部 経理課司計掛長	〃 経理課司計掛長
〃	滝沢 正幸	昇任	〃 国立天文台管理部会計課給与係長	〃 経理課給与掛主任
〃	浅田 泰司	転任	〃 文部省 高等教育局大学課	〃 経理課用度掛
〃	北川 嘉一	昇任	〃 経理課 長	〃 理学部事務長補佐
〃	小川 誠	〃	〃 総務課 課長補佐	〃 学生課体育主任
〃	吉澤 達雄	〃	文部技官経理課施設主任	文部技官経理課施設掛長
〃	〃	併任	〃 経理課 施設掛長	〃
〃	渡辺 道夫	配置換	文部事務官総務課庶務掛長	文部事務官原子核研究所人事掛長
〃	南雲 道男	転任	〃 総務課 出版掛長	〃 宇宙科学研究所管理部庶務課専門職員
〃	吉田 登	〃	〃 総務課 図書掛長	〃 学術情報センター管理部共同利用課情報・資料係長
〃	根本 豊作	配置換	〃 経理課 司計掛長	〃 理学部司計掛長
〃	菅原 暢廣	転任	〃 経理課 用度掛	〃 北海道大学教育学部札幌分校
〃	平井美智子	配置換	〃 総務課 庶務掛庶務主任	〃 総務課庶務掛主任
〃	田中 裕子	〃	〃 総務課 庶務掛文書主任	〃 経理課出納掛主任
〃	薩日内いさを	昇任	〃 総務課 出版掛主任	〃 総務課出版掛
〃	永田 順子	〃	〃 総務課 第一部業務掛契約主任	〃 経理課研究協力掛
〃	清水 要	〃	〃 総務課 第三部業務掛契約主任	〃 総務課第三部業務掛
〃	原 好子	〃	〃 経理課 研究協力掛主任	〃 総務課第四部業務掛
〃	三村 さと子	〃	〃 電子計算機室事務室主任	〃 電子計算機室事務室
〃	矢富 幸枝	配置換	〃 総務課 第四部業務掛	〃 総務課第一部業務掛
〃	菊地 みつ子	〃	〃 経理課 出納掛	〃 総務課庶務掛
〃	只木 靖子	〃	文部技官(第4部)	文部技官(第1部)
〃	渡邊 育郎	採用	文部事務官経理課給与掛	〃
〃	朝倉 良夫	〃	〃 経理課 用度掛	〃
〃	土田 茂宏	転任	文部技官(第1部)	警察庁技官関東管区警察局茨城県通信部
〃	安宅 学	採用	〃 (第3部)	〃
〃	築場 豊	〃	〃 (第4部)	〃

●退官のご挨拶

教授
本間 禎一



30年にわたる生産技術研究所での仕事がひとつの区切りを迎えました。実は研究所とのかかわりは30年余になります。そのスタートは大学院修士の院生として西千葉の一色貞文教授の研究室に所属した1958年にさかのぼります。当時、本郷の金属には小川芳樹教授がおられました。私が修士2年のとき、教授は60才を目前にして他界されました。その後、研究所の六本木移転、いわゆる大学紛争などを経て30有余年が過ぎました。わたし自身が60才を迎え、定年制の定めで退官することになりました。この間、多くのひと達と共に学び励んできたことを思い起こしつつ、原島文雄所長を先頭に、更に発展を続ける生研に心からの別れの挨拶を送ります。

教授
柴田 碧



生研の思い出は千葉からはじまる。昭和28年頃の公開で、森脇先生が真空管を使った電話のシミュレータを、富永先生が磁歪(?)を使った棒の共振疲労の実験を詳しく、学生である小生に丁寧に説明して下さったのを思い出す。本郷の公開より、より研究的な感じてよい印象を持った。その前後に初夏の土曜に、多分森大吉郎先生を訪ねるため、グラウンドの斜めの道を歩いていたら、宮津先生(第2部・小林先生が孫弟子)が肥たげをかついで、草むらから出てきたのにお会いした。昭和30年頃までは、空地でさつまいもを作っていたのである。国有地耕作許可願いという用紙が残っている。これから現在の生研まで40年近く、自動車、半導体、耐震防災等々、いずれも5~10年後にはあちらこちらでやるようになったことを、わが国で、そして世界で最初に手がけるのが生研である。いくつかの芽が出かけているのが、2000年、2010年には生研の研究がどうなっているか楽しみで

ある。小生の関与しているプロジェクトさえ、最終年度が2007年と、1999年がある。

教授
濱崎 襄二



明治10年発足の工部大学校は、日本の工学(技術の科学)の発祥の源でした。この研究所は、その伝統を引き継いだ総合的研究所です。構成員の力量を重んじ、相互の独立を尊重しながら互いに研鑽・協力して成果を挙げる所にその特徴があります。私がわずかでも工学の発展に役に立てたのであるならば、それは、長年に互って多くの事柄を教えられ、また、多くの過ちと失敗とを温かく見守って頂いた諸先生、諸先輩、同僚、後輩の方々、そして、活動を支えて頂いた事務局、試作工場、映像技術、計算機室等の方々を負うものです。現役の皆様が、一層技量を鍛えられ、協力して研究の成果を挙げられることを、また、対外的には、皆様がお心置きなく研究活動に専念できる環境を作り上げられることを切望致します。

教授
山口 楠雄



生研が六本木に移ってきたすぐ後に勤めはじめて、丁度30年で退官した。六本木の生研だからこそ続いたので、本郷では一寸無理だったかも知れない。しかし、大学院の講義はいつも他コースの学生が多く、満員だった。研究は、NC、プロセス制御、プラント計装、AEといろいろだったが、殆んど産業に利用されており、NCのシステムは今でもCGの円弧表示のアルゴリズムとして世界中で使われているのは幸運と思う。部長だった運動会スキー部も、4部校から2部校へ昇格した。しかし、未来は常に過去よりエキサイティングであり、いつまでか分からないとしても、計画を立て実行する、より大きな自由を得たのは楽しい。

●定(停)年退職者 表彰状伝達式

3月25日(水)、所長室にて表彰式、第4会議室にて昼食会が行われました。



第2部助手
遠藤敏彦さん



総務課庶務掛用務員
松村 治さん

●昇任のご挨拶

第5部 教授 魚本健人



2月16日付で土木構造学の教授に昇任いたしました。大学卒業後大成建設に勤務し、昭和53年に生産技術研究所に来てから14年になります。今まで主にセメント・コンクリート等の建設材料の利用に関する研究に従事してきましたが、この分野は昔から実験が大変である、数値解析が少ないなどの理由で今まで学生さんにもあまり人気がありませんでした。そこで、何とか新しい分野を開発し、イメージを変えようと考え、最近では、FRP等の新素材の利用、非破壊検査による材料の評価、ファジー推論を用いた劣化診断、セメントの水和反応等のコンピューターシミュレーションなど新しい研究も行っております。その結果、これらの新しい分野に興味を持つ若手研究者が増えてきたようです。少しずつではありますが部屋の雰囲気も変わり、学生数も増えてきましたので、これからも研究以外の面でも是非お気にお立ち寄り下さい。

第1部 助教授 中埜良昭



3月16日付で第1部動的材料強弱学部門の助教授に昇任いたしました。模型実験や数値解析、実構造物の地震被害調査などを通して、主にコンクリート系の建築構造物の耐震安全性向上に関する研究を行っています。平成元年に講師として着任して以来、あっという間に3年が過ぎた感がありますが、よく諸先輩方が言われるように、「生研はいろいろな分野の先生が一つ屋根の下に同居しているのが良い」という点を最近強く実感しています。この利点を生かしてこれからも生研を情報の発信拠点として頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

●平成4年度東京大学職員永年勤続者表彰

第4部	文部教官 東京大学助手	吉田章一郎
総務課	文部事務官 出版掛長	南雲 道男
//	//	//
	図書掛長	吉田 登
第3部	文部事務官	吉原 珠恵
第5部	//	鈴木 敦子
電子計算機室	//	三村さと子
第2部	文部技官	藤野 正俊
//	//	岡田 和三
映像技術室	//	倉科満壽夫

標記の表彰式が4月13日(月)に神田学士会館で行われ、有馬総長が祝辞を述べられるとともに、143名に表彰状を手渡された。引き続き祝賀会に入って、原島所長、鳥尾事務部長らと交え、それぞれの20年間に思い語り、和やかなうちに散会した。
(人事掛 根岸 正己 記)



●受賞

第2部	教授 木村好次	日本機械学会機素潤滑設計部門賞	学術・技術・国際交流に関する業績	1992.4.1
第2部	教授 木村好次	日本機械学会賞(論文賞)	弾性流体潤滑膜のせん断挙動に及ぼす温度上昇の影響	1992.4.2

INFORMATION

■生研公開のお知らせ

本年度の生研公開は、来たる6月4日(木)、5日(金)の両日行われ、各研究室の研究成果公開と下記の講演が予定されています。

講演会	6月4日(木)	「日米大学見たまま、感じたまま」富塚誠義 客員教授 「マイクロビームアナリシス ーナノ領域のキャラクタリゼーションを目指してー」二瓶好正 教授 「新しい超高層建築」原 廣司 教授
	6月5日(金)	「X線連続断層写真ー結晶の中をのぞくー」鈴木敬愛 教授 「トライボロジーの世界」木村好次 教授

■生研国際シンポジウムのお知らせ

第9回生研国際シンポジウム「ISRACVE室内気流と換気効率に関する国際シンポジウム」が7月22日～24日、空気調和・衛生工学会、ASHRAEの共催のもと日本建築学会、可視化情報学会、空気清浄協会の後援で開催されます。

会場は、東京大学山上会館です。参加ご希望の方は、第5部村上教授までご連絡下さい。

■生研セミナー

コース	テ ー マ	講 師	期 日
174	先端的超音波スペクトロスコーピー ー材料評価と物性研究ー	教 授 高木堅志郎 助 授 田中 肇 客員助 授 大野 正弘 助 手 山本 潤 助 手 酒井 啓司	7月9日(木) 10日(金)
175	技術者・研究者・事務職のための パソコンプレゼンテーション	教 授 藤井 陽一	7月14日(火)
176	最新固定砥粒研磨法 ー遊離砥粒の固定化技術ー	助 授 谷 泰弘 元受託研究員 河田 研治 助 手 池野 順一	7月22日(水)

■平成4年度 生産研究特集号 のお知らせ

7月号 生研におけるグループ研究	12月号 マイクロメカニクス
8月号 地球環境工学	1月号 乱流の数値シミュレーション (NST) その9
9月号 海洋工学	2月号 メソスコピックエレクトロニクス
10月号 バイオテクノロジー	3月号 災害軽減工学
11月号 メディアコンピューティング	

■平成4年度 常務委員会 委員名簿

第1部	第2部	第3部	第4部	第5部
*中桐 滋 岡野達雄	*吉識晴夫 藤田隆史	*高木幹雄 生駒俊明	*林 宏爾 工藤徹一	*高梨晃一 龍岡文夫

(注) *印委員は部主任



花見の印象

インテリジェントメカトロニクス(東芝)
第2部 客員助教授
ハネス プロイレル

幸い私達はここ都心に職場があります。多くの利点の一つに、すぐそばの青山墓地でお花見ができることがあげられます。桜についてのどんな写真や文章も、実際に自分の目にする体験には代えることができません。私は、日本にいる機会を生かして今年も再びあの桜をみにでかけました。

3月30日の月曜日のお昼と31日は、暖かくよく晴れて、そのころにはもう満開の桜が楽しめました。墓地の北側には、日本ではあまり見られないテーブルを外に出した小さなコーヒョップがありました。桜の下でのとびきりのご馳走は、焼きそばで、仕上げはコーヒョとケーキでした。

金曜日の夜、川勝研究室のスタートを祝うため、数人の同僚と一緒にまたまた花見を楽しむことができ、たいへん幸せでした。私たちは広島出身の西沖さんの作った純広島風お好み焼きをご馳走になりま



した。とてもたくさんのご機嫌な人たちと美しい夜桜、そのとりあわせは実に独特な雰囲気のものでした。今年この機会を逃した全ての人たちはなんてかわいそうなのでしょう！

祭の後で、ちょっと辛いことを言わせていただきます。私だけでなく、ほかの外国人にとっても、非常に驚くべきことは、墓地を南北に通る狭い道を車が通行できることです。墓地の東側と西側にすでに広い道路が2本もあるのですから、車にはそれで十分であって、それ以上交通量を増やすことはまったく無意味なことです。私の国、スイスやドイツでは、歩行者の立場から警察に抗議します。桜を愛する生研の私たちも「桜の期間歩行者天国」を主張したいところです。

編集室長退任にあたって

渡辺 正

平成元年の秋、前所長・岡田先生より二瓶研究推進室長(当時) 経由で編集を命ぜられてから、あっという間に2年半が過ぎました。隔月発行を守り通せたのは室員の皆様と映像技術室のご協力のおかげです。ありがとうございました。表紙づくりに苦勞した号が出るたび岡宮さんを囲んで開いた「反省会」を懐かしく思い出します。

紙面構成の再考や配布先の拡充など懸案はいくつも残っていますが、桑原先生を中心にした強力な新体制のもとで一段と親しまれる生研ニュースが発行され続けていくものと確信しております。

ご助言とご協力を

桑原雅夫

今年度から生研ニュースの編集室長を努めさせていただくこととなりました。渡辺前室長をはじめ編集室員が、これまで2年間築いてきて下さった「馴染み安い紙面」という基本路線に沿って編集作業を続けて参りたいと存じます。生研にきて「長」のつく職務は初めての私にとりまして、室長は大変光栄であると同時に、その責務に不安を覚えます。室員をはじめ生研の皆様のご協力とご助言をお願い申し上げます。最後に渡辺先生、ゼロからスタートした生研ニュースの2年間、本当にご苦勞さまでした。

生研ニュース編集室紹介

左から
春口道憲
川勝英樹
瀬崎 薫
葛西良三
桑原雅夫
田中 肇
光田好孝



編集後記

生研ニュースが創刊から早くも3年目に入る。室長も初代渡辺先生から桑原先生にバトンタッチされた。そろそろ歴史が感じられるようになったらうか。編集室の室員としては、発行を続けることにより、このニュースが生研での人と人とのコミュニケーションの姿を知る貴重な資料となるのではないかと考えている。

(H.K)